

第1章 戦場

軍隊の生活①

私は十五歳、特別年少兵！

筒井 肇さんのお話から

日本がアメリカと戦争を始めた昭和十六年（一九四一年）十二月八日、私は六年生でした。今から六十八年前のことです。私たち六年生は、先生から教室に集められ「日本は今日からアメリカとも戦争をするようになった。」と言われました。六年生ですから「ああ、そうかい。」というくらいの感じでした。それは、日本が昭和六年ぐらいからずっと戦争をしていたからです。昭和十六年ごろには十軒のうち六軒か七軒は、お父さんもお兄さんも兵隊にとられて居ないという状態でした。

○軍需工場 軍隊が必要とするものを作る工場。主に武器やその材料などを生産する。

私が国民学校高等科（今でいう中学校）二年生の春先、先生から「お前たちは高等科を卒業したら兵隊に行くか軍需工場に行くか、どちらに行くか家に帰って相談してこい。」と言われました。私は、兵隊に行きますと手を挙げ、お母さんにも言いました。そのころのお母さん方はみんな覚悟を決めていました。

夏ごろ、四、五十分汽車に乗って深川まで試験を受けに行きました。学科試験もやりました。そのころの試験は、百点満点のうち三十点ぐらいとればよかったと思います。あとは健康です。体力があるかないかで決められました。

そして、高等科二年生の十二月ごろだったと思います。先生に呼ばれて「お前は四月になったら海軍に入団するようになるぞ。」と言われました。二十人ぐらい受かったのですけれども、「二人だけが早く行くようになる。」と言われ、先生は二人に八重桜のマークを付けてくれました。

○軍人勅諭 明治天皇から陸海軍人に与えられた勅諭(天皇の下した諭旨)軍隊の教育はこれを基礎として実行された。

○練兵場 兵営所の中に設けられ教練や演習などを行う場所。

○特別年少兵 兵隊不足を補うために、十六歳未満の子どもを動員した制度。

学校を卒業した昭和十九年四月五日、私は十五歳で恵比島の駅を出発しました。出発の時は駅前であいさつをするのですが、お袋が「お前は人前であいさつのできるのか。」と随分心配しておりましたので、出発する日が決まってから神社へ行つて一生懸命暗記しました。軍人勅諭というものも暗記しなくてはいけなくて、大変でした。

駅前であいさつをして、お母さん方みんなに送られて行きました。その時、寂しいとは思いませんでした。汽車に乗って函館に行き、それから連絡船に乗り、昭和十九年四月七日か八日に横須賀海兵団に着きました。私は駅に着いたらすぐに海兵団があると書いていたが「これから二時間ぐらい歩くから荷物がある者は背負え。」と言われ、横須賀から武山海兵団まで二時間半ほど歩きました。疲れていたし、腹が減っていました。荷物を持って歩き、薄暗くなるころに練兵場に着きました。

私たちは、十五歳から十六歳までの子どもで、特別年少兵という兵隊です。午前中は勉強、午後から訓練という生活を一年間



イメージ図

軍需工場

私は十五歳、特別年少兵！

○カッター 複数の間
人がオールで漕ぐ大型の
ボート。帆走も可能。船
尾が四角に切られた形
で、救命、訓練、上陸など
に用いる。

続け、それが終わったら戦場に行くということでした。

朝六時に起きて六時半に練兵場に集合します。偉い人が高い壇に上がってあいさつをします。それが終わったら、各分隊の分隊長のあいさつがあります。それが終わってご飯に行きます。当番の人が用意し、教班長の号令でご飯を食べます。その後、八時から午前中の勉強です。

午後からは、訓練があります。海軍には、カッターの訓練がありました。十六人乗りのカッターを十二人でこぎます。陸が見えないところまで行きます。みんなで競争するのです。負けるとまた戻ります。そして、帰ってきたらご飯が当たらないのです。

また、水泳の訓練もありました。水泳は大きなプールでやります。泳げない者は赤い帽子、幾らか泳げる者は白い帽子が当たります。幾らか泳げる人は白い帽子に赤線が一本、ある程度なら二本というふうに教班長が見ています。水泳が始まると、赤帽と白帽は海に入れません。陸で平泳ぎの練習ばかりを十日間ばかりやりま



イメージ図

16人乗りのカッター

す。それが終わると、海の遠くの深い方に連れて行かれ、一斉に飛び込みます。ばたばたしているうちに沈みます。上がってくると浮き袋が投げられます。そうやって十日くらいすると何とか浮くのです。死にたくないし、怒られたくないし、ご飯を食べたいですからね。

そうやって上がってきたら、今度は相撲が毎回あります。各分隊で砂浜に土俵がたくさんつくってあります。負けたら同僚にたたかれました。結構痛かったです。

さらに、銃剣術があります。面と胴をつけると歩くだけでも精一杯の年齢です。それを十五歳の子どもがやっているのです。軍隊とはそういうところですよ。

海兵団を卒業すると、私は木更津海軍航空隊の暗号室に配属になりました。そのころからアメリカの爆撃機が来て、東京への爆撃が始まりました。そこで、奈良の丹波市に移動し、大和海軍航空隊に所属しました。私たちは、そこで沖縄に行く準備をしていました。もし、終戦が一、二か月遅れていたら、私は今日ここでみなさんにお会いして話をしていなかったと思います。

武山海兵団の一期生は三千人くらいいますが、そのうち二千人が戦場で弾に当たったりして死んでいます。二期生は千二百人死んだと言われています。その人たちはみんな十五歳、十六歳でお国のためと言いながら死んでいきました。

戦争ほど悲惨なものはないのです。戦争というのは、人を殺し、すべてのものを壊すのです。どんなことがあっても戦争をしてはならない、戦争は大変だったということだけをお話しして終わります。

DATA

平成21年度北区平和事業
聴き取り
・平成21年10月23日
・和光小学校



筒井 肇(つつい・はじめ)さん

・昭和4年(1929年)生まれ
・札幌市北区在住